

京都府北部の古墳概観

堤 圭三郎

京都府北部の古墳は古くから多くの研究者の関心を集めてきた。日本海に面する旧丹後国には、網野町網野銚子山古墳、丹後町神明山古墳、弥栄町黒部銚子山古墳、加悦町蛭子山古墳など全長 100m を越える巨大な前方後円墳がある。このうち、網野銚子山、神明山両古墳は全長 200m にも及ぶものであり、日本海沿岸の他の地域の古墳にくらべ、傑出した規模を誇っている。また、昭和 2 年 3 月に丹後地方を襲った大地震により、蛭子山古墳の墳頂部に祀られた蛭子神の小祠が倒壊し、その復旧のための整地作業中 1 個の石棺が掘り出され、石棺内部から鏡、刀などの副葬品が発見された。この石棺発見に伴う調査により、蛭子山古墳は全長 145m、3 段築成の前方後円墳で、各段には埴輪が立て巡らされ、斜面は葦石に覆われ、墳頂部の石棺の周りにも方形に埴輪が立て並べられていることがわかった。出土の石棺は花崗岩の 2 石を彫り抜いて蓋と身とし、特に身には頭部に当る部分に石枕を造りつけたものであり、形の雄大さと造りの精巧さで、まさに王者の棺にふさわしいものとして注目された。

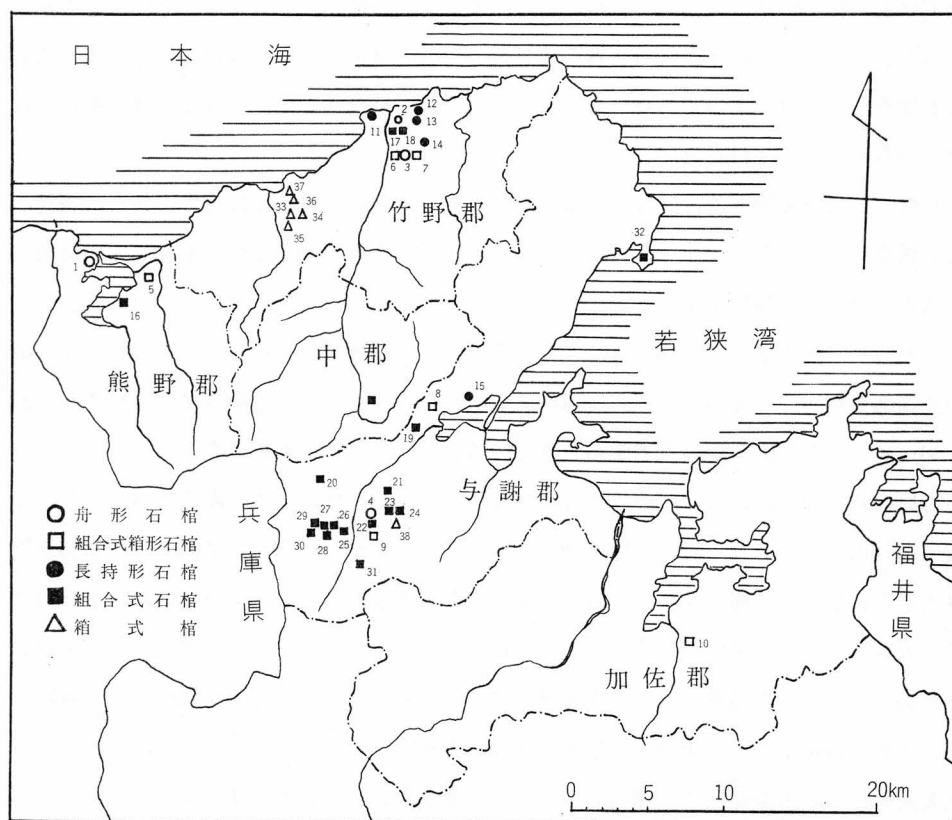
このように丹後地方の古墳は、日本海沿岸の他の地域の古墳と比較して、外形、規模、内部構造等の特異なことから、古墳時代文化の研究が古墳そのものを対象としていた明治・大正・昭和の各時期を通じ、研究者の関心を集めてきたことは当然のことである。

これらの巨大古墳をはじめとして多くの古墳は、河川流域の沖積平野に張り出した丘陵の先端部を利用して築かれている。現在ある集落の立地とくらべて標高にしてわずかに 30～40m 高い位置に大多数の古墳が築かれている。ところが、最近の調査によると、これらの古墳の背後の丘陵には、明確な盛り上りは認められないけれども、溝を巡らしたり、段状に削り出したりした一面に、埋葬施設があることがわかってきた。このような埋葬施設は方形台状墓として報告されているが、峰山町七尾遺跡^(注1)のように弥生時代前期にさかのぼるものもあり、弥生時代の各時期を通じて行われていた墓例であることがわかってきた。さらに、峰山町扇谷遺跡^(注2)のように丘陵斜面に二重の濠を巡らした弥生時代前期の集落跡が発見され、丹後地方の弥生時代の集落と墓制が大きくとりあげられるようになった。また、久美浜町湯舟坂古墳^(注3)発見の環頭大刀は、その絢爛豪華さから多くの注目を浴びた。これらの新しい考古学的発見により、丹後古代王国^(注4)が論じられるようになったが、それはやはり

丹後地方に特異な巨大古墳の発生の背景と、巨大古墳築造以後における丹後地方の社会の変遷を解明しようとするものであり、再び丹後地方の古墳に関心が集ったといえよう。

丹後地方の古墳の特徴の一つとして、埋葬施設の一種である石棺をあげることができる。さきにのべた蛭子山古墳出土の石棺は、その最も顕著な舟形石棺の例であるが、舞鶴市切山古墳出土の組合式箱形石棺、丹後町産土山古墳出土の長持形石棺など各種の石棺が知られている。本稿では、丹後地方出土の石棺のうち現存するものを中心とし、現在は確認できないが記録の残っているいくつかのものを加えて報告することにしたい。

人体を埋葬する場合、容器を用いることがある。この容器を棺と呼ぶが、その材質により、木棺、石棺、陶棺、埴輪棺などに分けられる。古墳時代に用いられた木棺のほとんどは腐朽し残存しないが、石棺は工事などにより無意識に破壊しないかぎり、原形を保って出土することが多い。発掘調査によるにせよ、偶然発見にせよ副葬品の出土によって木棺が使用されていたことを推測する場合と、石棺を発見した場合とでは、死者に対する畏怖



第1図 丹後地方出土石棺分布図

の念は、おのずから石棺に対する場合の方が大きい。したがって、木棺にくらべて石棺の方が死者を厚く葬ったと考えがちであるが、埋葬の当時において、すべての石棺が木棺より厚葬であったとは限らない。ただ、一般的には石棺を用いる場合には、その加工技術、運搬技術の面から、木棺を用いる場合にくらべて一定の制約があったことは否定できない。

丹後地方出土の石棺の確かな数は38基である。この数は京都府下の他の地域、すなわち丹波地方の13例、山城地方の34例にくらべても多く、日本海沿岸の他の地域の出土例にくらべても多い。丹後地方出土の38基の石棺を、その形、材質、製作技法などの面から、舟形石棺、組合式箱形石棺、長持形石棺、組合式石棺、箱式棺の5種類に分けてみた。

舟形石棺は1石を削り抜いて蓋または身としたもので、その両端の外面がやや斜めに切断加工されたものである。組合式箱形石棺は扁平な切石を用いて4辺を作り、底石と蓋石もまた扁平な切石を用いたものである。側石長辺には短辺を組合せるための溝が切られ、底石は側石を受けず棺底にはめ込まれているものである。長辺側石、底石、蓋石とも一石とは限らない。長持形石棺は5枚の板石を組合わせて棺身を作り、蓋の上面が蒲鉾形に盛り上ったもので、各石材の両端には縄掛突起がある。底石には側石を受けるための溝が掘られたり、段が設けられたりしたものがある。組合式石棺は組合式箱形石棺にくらべ小型のものである。4石を組合せて棺身を作ることは組合式箱形石棺と似ているが、棺の内法に当る部分が直線的であれば足りるわけで、4石がいずれも扁平に加工されているものではない。底石のあるものと無いものがあり、棺材も凝灰岩、花崗岩の両者がある。箱式棺は粘板岩または千枚岩などの堅くて扁平な板石を用いたもので、短辺は1石であることが多いが、長辺は数枚の石を用いている。蓋石も同じように数枚の板石からなり、その外見は単に遺体を覆う程度の簡単なものである。

丹後地方出土の石棺を5種類に分類する基準を述べたが、この基準に従って分類した結果が別表の丹後地方出土石棺地名表であり、第1図がその分布図である。

それぞれの石棺についての詳細は参考文献にゆずることとして、本稿では各型式ごとに補足的に概要をのべることにしたい。

まず、舟形石棺は久美浜町愛宕山古墳、丹後町一本松古墳、願興寺3号墳、加悦町蛭子山古墳出土の4例がある。蛭子山古墳の石棺は全長145mにおよぶ前方後円墳の後円部中央に古墳の主軸と直角の方向に埋められていた。身の総長は2.7mもあり、幅は一端で96cm、他端はやや狭く、両端に大きな縄掛突起がある。内部を長さ1.8m、幅60cm、深さ17cm彫り込み、頭部に当る部分に精巧な石枕が造りつけてある。蓋は身を被覆するに十分な大きさを備え、形状の壮大さは花崗岩を彫り込む加工技術とともに、まさに驚歎に値す

丹後地方出土石棺地名表

種 類	番号	古墳名称	所 在 地	外形等	副 葬 品	石棺所在地	備 考
舟形石棺	1	愛宕山古墳	久美浜町大向	円 墳		現 地	文献1
	2	一本松古墳	丹後町竹野一本松	墳形不明		丹後町立中央公民館	小児石棺文献2, 3
	3	願興寺3号墳	丹後町願興寺丸山	方 墳 か		現 地	文献2, 22
	4	蛭子山古墳	加悦町明石藤野	前方後円墳 埴輪, 葺石	内行花文鏡, 鉄刀, 鉄剣, 鉄鏃, 鉄斧	現 地	文献4, 5, 21
組合式箱形石棺	5	明神古墳	久美浜町平田	円 墳		現 地	
	6	願興寺1号墳	丹後町願興寺赤山	方 墳		現 地	文献2
	7	願興寺4号墳	丹後町願興寺経塚	方 墳	勾玉, 丸玉, 小玉, 管玉, 白玉	現 地	文献2, 22
	8	岩滝丸山古墳	岩滝町岩滝大風呂	円 墳	神人車馬画像鏡, 素 環頭大刀, 銅鏃	岩滝町立中央公民館	文献6
	9	加悦丸山古墳	加悦町温江オサ	大型円墳	方格規矩獣文鏡, 三 角縁神獣鏡片, 鉄刀 片	温江バス停傍	文献7
	10	切山古墳	舞鶴市伊佐津境谷	墳形不明	鉄剣, 鉄鏃, 銅鏃, 鉋, 鉄板状利器, 土 師器壺	舞鶴市立資料館	文献8
長持形石棺	11	馬場の内古墳	丹後町間人馬場	墳形不明	管玉, 帯金具, 鉄斧 鋤先	間人小学校	文献9
	12	産土山古墳	丹後町竹野宮の越	大型円墳	四獣鏡, 勾玉, 管玉 小玉, 環頭刀子, 劍 鋸, 鉋, 矛, 弓, 鉄 鏃, 埴製枕他	現 地	文献10, 11, 16
	13		丹後町竹野	出土地不明		竹野区墓地	
	14	丸山古墳	丹後町宮			現 地	文献3
	15	法王寺古墳	岩滝町男山法王寺	前方後円墳 埴輪, 葺石	埴輪棺, 石枕	府立丹後郷土資料館	文献6
組合式石棺	16	平野古墳	久美浜町神崎小谷	墳形不明	刀子	神崎小学校	
	17	一本松古墳 (2号棺)	丹後町竹野一本松	墳形不明		丹後町教育委員会	文献3 小児石棺
	18	一本松古墳 (3号棺)	丹後町竹野一本松	墳形不明	須恵器甕, 石錘	丹後町教育委員会	文献3 小児石棺
	19	宝蔵寺3号墳	岩滝町石田宝蔵寺	円 墳	鉄刀子, 土師器片	現 地	文献12
	20	比丘尼2号墳	野田川町岩屋庄内	円 墳	刀剣, 人骨	現 地	文献23
	21	入谷西D1号墳	加悦町明石入谷	円 墳	須恵器杯	現 地	
	22	作山古墳	加悦町明石作山	前方後円墳 埴輪, 葺石	変形四獣鏡, 石剣, 勾玉, 管玉, 小玉, 鉄剣, 刀子, 斧頭, 鏃, 鉋	現 地	文献4, 5
	23	愛宕山3号墳 (1号棺)	加悦町明石表ノ谷	円 墳	管玉, 刀子, 人骨, 他の木棺墓から鏡, 勾玉, 管玉, 小玉, 土師器	現 地	文献13
	24	愛宕山3号墳 (2号棺)	加悦町明石表ノ谷	円 墳	刀子, 鉋, 人骨	不 明	文献13 小児石棺
	25	大師山1号墳	加悦町加悦丸山	円 墳	金環, 勾玉, 小玉, 鉄刀	現 地	文献14
	26	大師山2号墳	加悦町加悦丸山	円 墳		現 地	文献14
	27	大師山3号墳 (1号棺)	加悦町加悦丸山	円 墳	鉄剣	現 地	文献14, 15

種 類	番号	古墳名称	所 在 地	外形等	副 葬 品	石棺所在地	備 考
	28	大師山3号墳 (2号棺)	加悦町加悦丸山	円 墳		現 地	文献14
	29	大師山4号墳	加悦町加悦丸山	円 墳		現 地	文献14, 15
	30	大師山6号墳	加悦町加悦丸山	円 墳	鉄刀	現 地	文献14
	31	愛宕神社古墳	加悦町後野	墳形不明	鹿角装剣, 人骨	現 地	文献16
	32	カルビ古墳	伊根町亀山カルビ	墳形不明		現 地	
箱 式 棺	33	新浜2号墳	網野町網野新浜	墳形不明		消 滅	文献17
	34	新浜3号墳	網野町網野新浜	墳形不明	石枕, 鉄剣	消 滅	文献17
	35	勝山古墳	網野町網野妹	円 墳	須恵器杯	消 滅	文献18
	36	岡3号墳	網野町小浜岡	墳形不明	須恵器杯, 鉄鏃, 刀 子	消 滅	文献19
	37	岡4号墳	網野町小浜岡	墳形不明		消 滅	文献20
	38	大師山34号墳	加悦町明石藤野	円 墳	土師器壺, 埴	現 地	

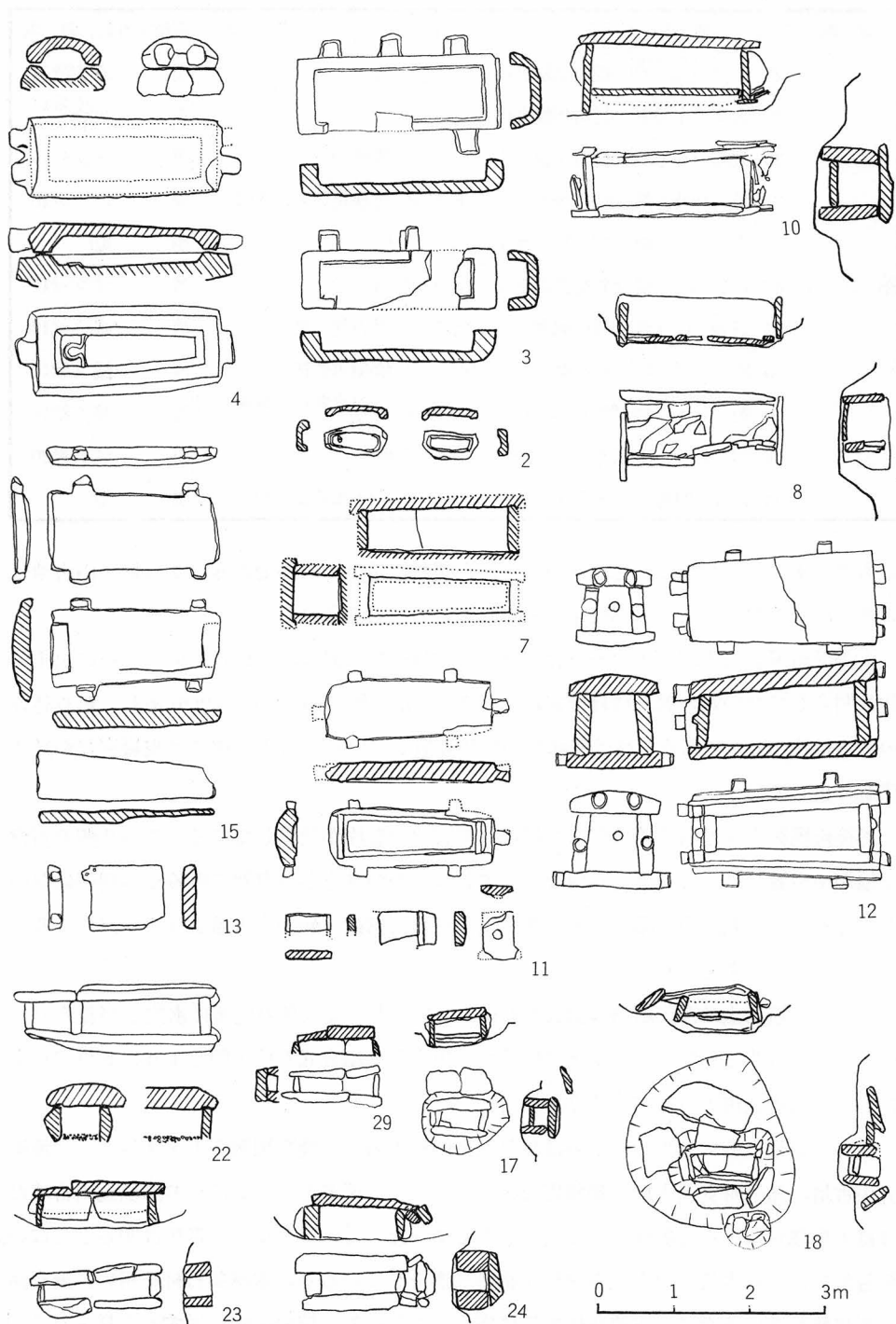
るものであり、わが国の舟形石棺の中で最も優れた遺品の一つである。この蛭子山古墳は外形、副葬品などから4世紀後半に築かれたものと考えられる。

久美浜町愛宕山古墳出土の石棺は、愛宕山古墳の麓に置かれているもので、その出土年代は明らかでないが、蓋石はほぼ完形で長さ2.1m、幅76cm、厚さ42cmあり、彫り込みの深さは約15cmである。身は底部がかなり破損している。蓋の両端には縄掛突起が計4個造り出している。

丹後町願興寺3号墳の墳頂部に2個の舟形石棺の破片が放置してある。この2個の石棺は幅がやや異なり一方を蓋とし他を身とすれば、合わせ方が不自然であるから別個体なのかもしれない。愛宕山、願興寺両古墳出土の舟形石棺は、蛭子山古墳よりやや遅れて5世紀前半のものと考えられる。

一本松古墳出土の舟形石棺は総長80cmの小型のもので、身の底部に水抜きが施されている。年代は明らかでないが、後に付近から出土した組合式石棺と同じように5世紀後半に造られた小児用の石棺であろう。

組合式箱形石棺に分類したものは久美浜町明神古墳、丹後町願興寺1・4号墳、岩滝町丸山古墳、加悦町丸山古墳、舞鶴市切山古墳出土の6例である。このうち加悦丸山古墳だけは主体部がほとんど破壊された後の調査であったので、棺の正確な形状は明らかでない。報告書では「本古墳の組合式石棺は、特異な形をしているが、重厚な石材を用い、蓋を蒲鉾形に整えている点で、古墳時代中期に盛行した長持形石棺の系列に属すると見られる。」と結んである。本稿で組合式箱形石棺に分類したのは、蓋石が花崗岩であり、長持形石棺特有の縄掛突起が施されていないこと、地理的な特性を加えて、あくまでも推測の域を出



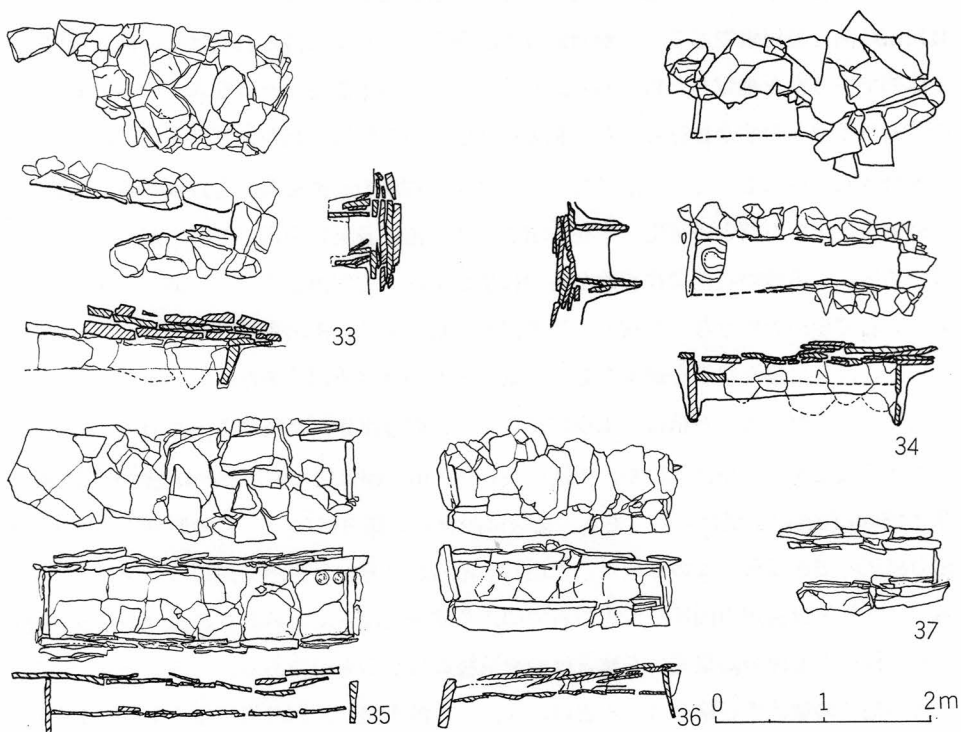
第2図 丹後地方出土石棺実測図(I)

ないものであることを付言しておきたい。

願興寺1号墳の石棺は、墳頂部に埋没しているが一部露出し、内部を見ることができる。4号墳の石棺は露出しており、その形状を窺うことができる。凝灰岩製の整美な組合式箱形石棺である。底石の上に側石が乗っている点では、長持形石棺に近い型式のものと考えられる。この願興寺古墳群出土と伝えられる硬玉製勾玉、碧玉製管玉、石製臼玉などの石製品がどの古墳から出土したものであるかは明らかでないが、地名表では便宜的に4号墳出土としておいた。これらの出土品から、この願興寺古墳群の石棺は5世紀前半のものと考えられる。

岩滝丸山古墳と切山古墳出土の石棺は、大きさや構造がよく似ている。底石は棺の四壁の内法にはめ込まれている。岩滝丸山古墳の場合は、片方の短辺の側石が長辺の端部を押さえるように組まれている点は、石棺の構造の点から見れば後出のものと考えられる。副葬品から考えて両古墳は5世紀初めに築造されたものであろう。

長持形石棺は最も典型的な丹後町産土山古墳出土のものを含めて5例が知られている。産土山古墳出土の長持形石棺は完形品で見つかった唯一のものであり、現在も墳丘内に埋め戻され、古墳は国の史跡に指定されている。



第3図 丹後地方出土石棺実測図(2)

馬場の内古墳出土の石棺は、工事中の偶然発見であり蓋石はほぼ完形であるが、側石は断片のみ残り、底石にいたっては小さく破砕されてしまっていた。蓋石の短辺両端に1個ずつ、長辺に2個ずつ計6個の縄掛突起があり、全体として細身で小型の石棺である。

産土山古墳の南に全長200mに及ぶ神明山古墳があり、この神明山古墳の南に小さな谷を隔てた丘陵先端に直径約30mの丸山古墳がある。丸山古墳の墳頂部にも長持形石棺の破片と思われる石材が数個置かれている。また、産土山古墳と神明山古墳の中間に当る道路脇に廻国供養塔などを集めた一面があり、「南無阿弥陀仏」と刻まれた巨大な石碑の台座に長持形石棺の蓋石が使われている。長さ95cm、幅87cmの石材であるが、現在置かれている方位で南側に2個の縄掛突起がある。これらの石碑群は各地にあったものが最近一か所に集められたものであるから、当初から台座に用いられていたのか、移転の時に利用されたのかは明らかでない。この石棺を台座に利用した石碑には延宝九年(1681)の銘が刻まれているので、もし当初から台座に用いられていたとすれば、ずいぶん古く付近の古墳から掘り出されたものである。以上4例の長持形石棺が竹野川河口付近に集中して存在することは注目に値する。

岩滝町男山の法王寺古墳の長持形石棺は、小祠を祀る藤塚という小高い丘の上に置かれていた。昭和43年にこの藤塚の背後の丘陵を発掘調査したところ、埴輪、葺石を巡らす全長74mの前方後円墳であることがわかった。藤塚にあった長持形石棺はこの前方後円墳の主体部であったと推定したのである。石棺は蓋石と長辺側石の一つを残すのみである。その蓋石は上面がわずかに盛り上り、長辺に2個ずつの縄掛突起があり、短辺にはない。

組合式石棺は最も多く、最近発見されたカルビ古墳の石棺を含めて17例ある。久美浜町平野古墳出土の石棺と丹後町一本松古墳2・3号棺は凝灰岩を用いているが、他は花崗岩製である。この種の石棺の代表的なものは加悦町作山古墳出土のものである。花崗岩の長大な2石で短辺の扁平な石を挟んで棺の四壁を構成する。作山古墳の場合は、さらに長辺の一方の側石に扁平な石を継ぎたして、副棺ともいふべき部分を作っている。

久美浜町平野古墳の石棺は、工事により完全に掘り出された後であったので、出土した棺材から推定するほかはないが、内法で長さ100cm、幅は広い方が33cm、狭い方が28cm、深さ28cm程度の小型のものである。棺材は凝灰岩で底石はない。丹後町一本松2・3号棺も凝灰岩であるが、この2例だけは底石がある。2号棺は長辺で短辺の石を挟む型であるが、3号棺は長辺の両端を短辺の石で押える構造になっている。この二つの棺は、材質、規模、構造とも他の同型式の石棺とはやや系統の異なるものである。

その他この型式の石棺のほとんどは、大江山に源を発した阿蘇海に注ぐ全長約16kmの野田川流域から出土している。愛宕神社古墳出土の石棺は、昭和15年に発見されたもので

あるが現存しない。^(注5)伊根町カルビ古墳の石棺は、^(注6)昭和60年10月に土取りのためその一部が露出したもので、未だ発掘調査されず現地に保存されている。この型式の石棺と推定されるものが、他にも伝承として数例ある。加悦町明石の枝山古墳、藤野古墳、日吉神社1号墳である。このうち枝山古墳からは内行花文鏡が出土している。この型式の石棺には、極端に規模が小さく、幼児用石棺ではないかと思われるものも多く、実際に愛宕山3号墳2号棺のように幼児人骨が出土した例もある。

箱式棺は6例ある。加悦町大師山34号墳の例は墳頂部に凝灰岩質の扁平な石が多数散乱していることから、箱式棺の例に加えたのであるが、あるいは、組合式箱形石棺に属するものかもしれない。最近になって土師器の壺と小型丸底埴が墳頂部付近で採集されたが、これらは5世紀前半のものと考えられる。

その他の5例はいずれも網野町出土のものである。底石のあるのは勝山古墳と岡3号墳であり、新浜3号墳からは石枕と鉄剣が出土している。人骨は岡3・4号墳の石棺から出土し、岡3号、勝山古墳からは須恵器蓋杯が出土している。この種の箱式棺は網野町の福田川流域とその河口付近の砂丘地帯に集中しており、地域的特性を認めることができるが、時期的には5世紀の末から6世紀初頭にかけて築かれたものである。

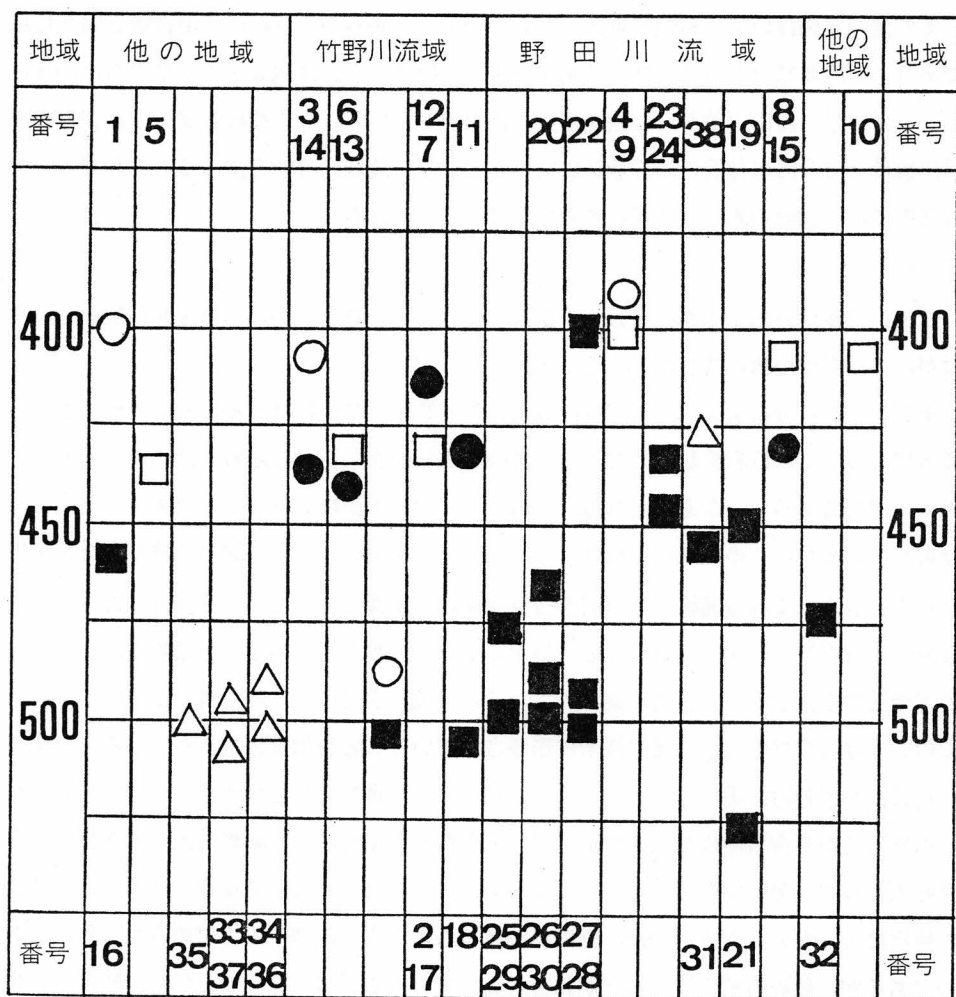
以上、丹後地方出土の石棺を五つの型式に分け、それぞれについて補足的な概要をのべたが、ここでは全体の特徴をのべることにする。

まず、石棺の分布状況については、野田川流域を除いて他はほとんど海岸に極く近いところにある。これは石棺材として凝灰岩質の加工しやすい石材を求めるため、入手および運搬に便利であることがあげられる。野田川流域では下流域よりも中、上流域に集中的に分布しているが、この地域の石棺はほとんど花崗岩を用いており、同じ地域で石材を産出することから、これも運搬技術の面から見た地理的特徴であるといえる。特に竹野川流域に分布する石棺は、すべて河口付近に集中している。竹野川中流域の弥栄町、峰山町にも前方後円墳を含む多くの古墳が築かれているが、現在までのところ石棺の出土例がない。このことは石棺材の入手と運搬技術に影響されていることを如実に物語っているといえる。

箱式棺が網野町に集中していることもまた小さな地理的特徴といえる。この種の箱式棺は弥生時代から古墳時代を通じて永く用いられた葬法であるが、網野町出土の5例は、5世紀末から6世紀初頭のごく短い期間に築かれたことは、この時期の被葬者のもつ社会的性格によるものだろう。また、野田川流域の石棺のうち、蛭子山古墳の石棺は特別のものであるが、他の石棺のほとんどが組合式石棺であることは、花崗岩という材質の特徴によって生じたものであろう。同じ型式の石棺が4世紀末ないし5世紀初頭から6世紀前半

まで延々と作られているという点で、材質による特徴と考えたい。なお、この種の石棺が長期にわたっている点を考えれば、その規模、構造の詳細を検討することによって、築造の前後関係を明らかにすることができるかもしれない。

凝灰岩を用いた舟形石棺、組合式箱形石棺、長持形石棺が、河口付近の海岸線に点在していることは、古墳時代前期すなわち4世紀代に竹野川流域と野田川流域を統治した2大首長の勢力が、古墳時代中期になって交通の要衝に分散し、群雄の勢力均衡の政治状況がつくられたのではなかろうか。石棺を用いた被葬者たちは、畿内大和政権の統治の下に、拠点的地域の支配者となり、再び丹後地方を統一するような巨大な勢力に成長することはなかった。そして、次の古墳時代後期には、畿内で流行する家形石棺を造るほどの勢力をもつ統治者も現れなかったのである。横穴式石室をもつ古墳は、丹後地方各地に築かれる



第4図 丹後地方出土石棺時期想定一覧

が、家形石棺をもつほどの強力な首長がいなかったことは、丹後地方が強力な中央集権的政治機構に直接に組みこまれていったことを物語るものであろう。

丹後地方の石棺の種類、構造、分布状況は、そのまま古墳文化の変遷の一端を物語るものであるが、これまでのべたことを中心として、石棺出土地名表に掲出した古墳の築造時期を第4図のとおり図示した。時期決定のすべての根拠を示さないまま、結果だけを表現することは、誤解を招くおそれはあるが、前後10年程度の誤差を含み、現段階で推測される築造時期を大胆に表現したものである。

丹後地方の開発事業は今や風雲急を告げている。それは、熊野郡、竹野郡、中郡および宮津市を対象に計画されている国営農地開発事業である。この事業はこれまで行われてきた点または線による開発事業と異なり、あの山もこの丘もすべて面として削り取ってしまう大きな開発事業である。こうした開発事業によって、地下に埋蔵されている文化財に影響を及ぼさぬはずはない。古墳に埋葬された石棺が偶然に発見されることもあるだろう。新たな石棺が出土する可能性を予想し、それらが適切に保存されることを期待し、この小論^(注7)の結びとしたい。

なお、小論を草するにあたっては、佐藤晃一氏から数々の資料の提供と示教を得たことを明記し、同氏に謝意をのべるものである。

(堤 圭三郎＝京都府教育庁指導部文化財保護課長)

地名表掲出参考文献

- 1 『京都府熊野郡誌』京都府熊野郡役所 1923
- 2 田中彩太、広瀬和雄他「丹後地域の古式古墳」『同志社考古』同志社大学考古学研究会 1973
- 3 坪倉利正、平良泰久他「丹後竹野遺跡」『丹後町文化財調査報告』第2集 1983
- 4 梅原末治「桑飼村蛭子山・作山両古墳ノ調査（上）」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第12冊 1931
- 5 梅原末治「桑飼村蛭子山・作山両古墳ノ調査（下）」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14冊 1933
- 6 堤圭三郎「法王寺・岩滝丸山両古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1970）』京都府教育委員会 1970
- 7 横山浩一「加悦丸山古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会 1961
- 8 樋口隆康「舞鶴切山古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会 1961
- 9 杉原和雄「馬場ノ内古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1970）』京都府教育委員会 1970
- 10 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査（上）」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第20冊 1940
- 11 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査（下）」『京都府文化財調査報告』第21冊 1955

- 12 中谷雅治, 林 和廣, 佐藤晃一「柿ノ木2号墳発掘調査報告書」『宮津市文化財調査報告』1
宮津市教育委員会 1970
- 13 堤圭三郎「愛宕山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 (1966)』京都府教育委員会
1966
- 14 梅原末治「加悦町大師山ノ箱式棺」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊 1925
- 15 佐藤晃一「加悦町加悦大師山古墳群について」『太邇波考古』第3号 両丹技師の会 1983
- 16 『京都大学文学部博物館考古資料目録』第2部 京都大学文学部 1968
- 17 杉原和雄, 三浦 到「新浜2・3号墳発掘調査概要」『網野町文化財調査報告』第1集 網野
町教育委員会 1977
- 18 釈 龍雄『勝山古墳発掘調査報告』1963
- 19 樋口隆康「網野岡の三古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会 1961
- 20 堤圭三郎「岡4号墳発掘調査概要」『網野町文化財調査報告』第1集 網野町教育委員会
1977
- 21 佐藤晃一, 細川修平「蛭子山古墳」『加悦町文化財調査概要』4 加悦町教育委員会 1985
- 22 『両丹地方の方墳』丹後郷土資料館 1978
- 23 『野田川町誌』野田川町 1969
- 24 梅原末治「男山法王寺ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第5冊 1924

.....

- 注1 田中光浩, 林 和廣「七尾遺跡発掘調査報告書」『峰山町文化財調査報告』第8集 峰山
町教育委員会 1982
- 注2 田中光浩「扇谷遺跡発掘調査概要」『峰山町文化財調査報告』第9集 峰山町教育委員会
1983
- 注3 奥村清一郎, 新納 泉他「湯舟坂2号墳」『久美浜町文化財調査報告』第7集 久美浜町
教育委員会 1983
- 注4 門脇楨二「丹後王国論への序章」『丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会 1983
- 注5 「考古学」第11巻第5号(1940)の会員短信欄に「京都府与謝郡加悦町後野, 愛宕神社境内
で箱式棺を主体とする一古墳が発掘せられ, 棺内より人骨及び直弧文ある鹿角装太刀一口
が検出せられた。」とあり, 文献16には, 京都府加悦町香河・愛宕神社古墳とある。後野
にも香河にも愛宕神社があるが, 加悦町教育委員会佐藤晃一氏の確認で, 後野の愛宕神社
であることがわかった。
- 注6 昭和61年8月 伊根町教育委員会により発掘調査が実施された。同町教育委員会「中寄
(カルビ)古墳発掘調査現地説明会資料」1986.9 参照
- 注7 本稿の脱稿後, 昭和61年5月に中郡大宮町大谷古墳の発掘調査が行われ, 組合式石棺が検
出された。大宮町教育委員会「大谷古墳現地説明会資料」1986.6 参照